

AFC フォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

8

2015

特集「農」のリーダー像に迫る



「農」のリーダー像に迫る

3 いま農業現場に求めるリーダーシップ

小野 善生

これからの農業は他産業との連携や農家の組織化と組織間の連携が必要。それには資質と能力を兼ね備えたリーダーの存在が不可欠と筆者は説く

7 集落営農組織の法人化が地域を変えた

吉弘 昌昭

集落法人設立までの合意形成や設立後の運営にはリーダーの存在が欠かせない。広島県の事例を基に集落法人でのリーダーシップについて探る

11 自由化時代を読み成長を続ける経営手腕

境野 徳夫

外国産ひな輸入自由化を契機とする激しい競争の中でも右肩上がりの成長を遂げた育雛業界のリーダーは、成長戦略と人材育成の重要性を強調する

情報戦略レポート

15 国産品への支持傾向強まる 食品購入判断は、価格や国産を重視

—2014年度下半期 消費者動向調査—

経営紹介

経営紹介 特別企画「アグリフードEXPO東京2015」

23 日本一幸せなせんべい屋 200年後の存続を目指す

スギ製菓株式会社／愛知県

新商品開発、販売チャネル開拓、そして輸出のきっかけをつかみたい。攻めの気持ちも大切とアグリフードEXPO東京2015の出展を決めた

変革は人にあり

27 河二 敏雄

有限会社かわに／石川県

加賀野菜のサツマイモ「五郎島金時」の生産者が加工・販売を手掛ける六次産業化を果たし、さらに数字に強い経営を目指す。その経営手法とは



撮影：中野 耕志

千葉県柏市
1997年夏撮影

谷津田の夏

■ 台地を刻み込む谷筋に開かれた田んぼである谷津田、雑木林、小川、そして鎮守の森など里山の自然は人々の暮らしがつくった環境である。しかし、そこには人と生き物との共生のかたちがある■

シリーズ・その他

観天望気

『スマート・テロワール』のすすめ 松尾 雅彦 …… 2

農と食の邂逅

愛媛エフ・イー・ゼット株式会社 玉井 奈緒子
青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) …… 19

フォーラムエッセイ

野菜いっぱい生活 酒井 千佳 …… 22

主張・多論百出

NPO法人ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会
武藤 一夫 …… 25

耳よりな話 161

刃物を使わず皮むきをする加工法 野口 真己 …… 30

まちづくりむらづくり

農山村の復権を目指して
茶源郷は生業景観のまちづくり
堀 忠雄 …… 31

書評

三輪 節生 著『食卓からアサリが消える日』
宇根 豊 …… 34

インフォメーション

戦略的経営で稼げる農業へ農業法人向けセミナー
一開催 熊本支店 …… 35

農業者と金融機関との関係発展を目指した研究会を
開催 鹿児島支店 …… 35

北海道新幹線開業を見据えた商談会を開催
青森支店 …… 35

農産物のブランド構築に公的支援制度活用の講演
甲府支店 …… 35

新規就農を希望される方へ …… 36

みんなの広場・編集後記 …… 37

ご案内

第10回アグリフードEXPO東京2015 …… 38

観天 望気

『スマート・テロワール』のすすめ

英国人女性イザベラ・バードは、一八七八年に外国人がまだ足を踏み入れたことのない東北地方を馬で縦断し、その時訪れた山形県米沢地方について次のように記録しています。

「米沢平野はまったくのエデンの園だ。鋤のかわりに鉛筆でかきならされたようで、米、綿、トウモロコシ、煙草、麻、藍、豆類、茄子、くるみ、瓜、胡瓜、柿、杏、柘榴が豊富に栽培されている。繁栄し、自信に満ち、田畑のすべてがそれを耕作する人々に属する稔り多きはほえみの地、アジアのアルカディアなのだ」。(イザベラ・バード『日本奥地紀行』)

現在の日本の農村からはイザベラ・バードの見た五穀豊穡の美しい農村の面影は、ほとんど失われています。

戦後七〇年、全国の農家はこぞつて米作りに集中し、しかも消費者の米離れで水田は過剰になり、全国に休耕田や耕作放棄地が広がり、農村は無残なほど殺伐とした光景が常態になってしまいました。まさに「田園まさに蕪^{あれ}なんとす」(陶淵明『帰去来辞』)です。

私は『スマート・テロワール』(美しき豊穡^{むらち}の邑)を著し、荒廃した農村に昔は当たり前であった彩りあふれる風景の回復を提唱しています。

スマート・テロワールへの道筋は休耕田を畑に変えて、小麦、大豆、トウモロコシ、ブドウ、ジャガイモなどの畑作物栽培に転換し、同時に牛や豚を放牧飼育することを端緒とします。ついで、畑作と畜産を原料とする、みそ、しょうゆ、パン、麺、ハム、ソーセージ、チーズ、ワインなどの加工場や醸造所を呼び込みます。さらに、これらの食品の地域内流通業を復興し、近隣の地方都市を含めた人口一〇万〜八〇万人の自給圏たるスマート・テロワールを形成していくのが、私の構想です。

スマート・テロワールが全国に一〇〇カ所ほど構築できれば、食料自給率の大幅改善と、GDPの二〜三%ほどの押し上げが可能になるでしょう。そして、何よりもイザベラ・バードの見た逝きし日の農村の面影が、現実のものとしてよみがえることが期待できると考えております。



NPO法人「日本で最も美しい村」連合 副会長

松尾 雅彦

まつお まさひこ

1941年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業。67年カルビー株式会社入社。92年同社社長、2006年同社相談役に就任。08年第41回食品産業功労賞受賞。新品種産業化研究会(JATAFF内)会長、スマート・テロワール協会会長。著書に『スマート・テロワール 農村消滅論からの大転換』(学芸出版社)。

小さな針の穴をたどり
野菜の輸出を
切り拓いていく
生産者に寄り添って
大きな穴になればうれしい

農と食
の邂逅

玉井 奈緒子 さん

愛媛県松山市

愛媛エフ・エー・ゼット株式会社
アイロット事業部係長

農業・農村全体の所得を今後一〇年間に倍増する。政府が目指す目標である。達成には四つのプランが提案され、その二つに「需要フロンティア」、輸出の促進がある。「輸出をしたい」と希望する農家の支援に活動する女性がいる。





P19: 愛媛FAZが輸出している水菜の生産者トリプルウィンの松田さん(右)と P20: コンテナに積んだ農水産物はおおむね松山港、神戸港を経て東南アジアに輸出される(右上) 松田さんの水菜は飲食店でサラダや付け合わせに使われる(右下右) 輸出先では高糖度のトマトや柑橘が好評だが「健康ブームもあって野菜は有望だと思う」と奈緒子さん(右下左) 歴史好き。子どもの頃の夢は考古学者だった(左)

二カ月に一度は海外に

「日本の農産物が海外でおいしいと認められるのは、そこに込められた生産者の真面目さや努力も価値として伝わることだと思います」――。愛媛エフ・エー・ゼット株式会社(以下、愛媛FAZ)で、愛媛県産の農水産物を中心としたアジア向け輸出の業務に携わる玉井奈緒子さん(三七歳)はこう話す。

二カ月に一度は輸出先であるシンガポール、マレーシアに向かう。現地の輸入商社との商談やエンドユーザーであるレストランやスーパーへの訪問、さらには日本の生産者と共に店舗を訪れ、リサーチや試食販売をするなど忙しくスケジュールをこなす。「お客さまの反応をつかんで生産者に返すことも大事です。問題点を見つけ、改善策を探る糸口にもなりますから」と奈緒子さんも自身も進んで売り場に立つ。

愛媛FAZは一九九三年に愛媛県や民間企業が出資して設立された第三セクター。松山港の近くにあり、コンベンション施設や国際物流ターミナルなどの施設も整えている。設立当時、日本は貿易黒字の解消という課題を抱えていた。そこで輸入を促進するための法律「FAZ法※」を作り、各地に実践する地域を整備した。松山港は地域FAZ第一号に承認された。

その後、国産の農水産物の輸出を拡大させようという機運が高まり、愛媛FAZは二〇一〇年から輸出も手掛けるようになった。

た。愛媛県には豊富な農水産物があるが、一次産業者が独自で輸出を手掛けようと思っても物流や書類作成などの壁がある。そこで愛媛FAZが窓口となり、輸出業務全般を支援するようになった。

奈緒子さんは入社以来、イベント用にコンベンション施設を貸したり、自らイベントを企画・実行したりする業務に就いてきたが、一三年より輸出を手掛けるようになった。「県とか国という大きな括りで仕事をするようになるなんて思ってもいませんでした」とはにかむ。

生産者に寄りそう輸出

二〇一三年、愛媛FAZは日本公庫の「トリアル輸出支援事業」に名乗りを上げた。この事業は、海外販路開拓を目指す農林水産業者と商社が連携し、輸出の糸口をつかもうというもの。愛媛FAZの他に二一の商社が農林水産業者の受け皿となって、輸出拡大を図っている。「それまでは水産加工品の輸出が中心でしたが、生鮮の果物・野菜なども加わりました」と奈緒子さん。これまで関わりがなかった生産者と商談する機会や生産現場に出掛ける時間も増えた。取引に至った生産者は三〇〇件を超え、二〇一三年度の産品は定期的に輸出するまでになった。農産物では柑橘、イチゴ、ネギ、水菜、玉ネギ、里芋などの果物や野菜を輸出し、一四年度の輸出実績は約一七〇〇万円にまで増えた。

現地の輸入商社から「こういった商品が欲

しい」と言われてから商品や生産者を探すこともあれば、生産者から「これを輸出したい」と相談されて売り先を見つけることもある。「どちらかというと後者のほうに力が入ります。生産者に寄り添った形で輸出がしたいです。要望されたものを手配する方が成約率は高いはずだが、あえて苦勞の多い後者



「おいしい農水産物を海外の人に伝えることで愛媛の人々をさらに元気にできればうれしい」と話す。松山市街地を走る路面電車の前で

に力を入れるのはなぜなのか。

「私は愛媛県が大好きなんです。おいしいものを食べることも好き。海外にもそれぞれおいしいものはあります。でも、日本の生産者がさまざまな工夫をして、こだわりの持ちながら作っている姿に触れ、感動してしまっただんです。そういうものをこちらから紹介し、

バイヤーに欲しいと言わせることができれば、これこそが醍醐味かなと思うのです」

バイヤーをうならせるようなものを集めるためにも、生産者と何度も会って情報を引き出す。「味や食感、菌触りなどを確認しますし、品種によって味も機能性も違うので納得いくまで質問します。根掘り葉掘り聞くので嫌がられているかもしれません」

個別の農家がこなすには難しい物流の手配のみならず、通関手続きに必要な書類の作成も行う点が愛媛FAZの特徴で、まさに生産者にとって心強いサポーターなのだ。

輸出も二つの選択肢

輸出をやってみたいという生産者との話し合いで、最初にぶつかる壁は価格だ。日本の農産物は海外では高価で販売されているイメージが強く、国内の取引価格より高値で売れば、と期待する生産者が多い。

しかし、国内外の輸送費や通関などの諸経費を含めると、エンドユーザー段階の価格は日本の約三倍にもなる。これ以上の価格差が生じないように、生産者には国内向けとほぼ同じ価格を提示することが多い。

講師も務める生産者向けのセミナーでは、奈緒子さんはこの話題にも必ず触れる。「それでも今後国内の需要が減り、その分輸出のウェイトが増えていくことを考えると、輸出も選択肢の一つになると思います」

海外で三倍になってしまう価格にも、奈緒子さんは正面から向き合っている。「プレー

ヤーが少しずつコスト削減を図り、高値でも手の届く範囲に抑えられれば、日本の農産物は味、安全性、機能性の全ての面で優れ、海外で絶対に売れると思います」と熱く語る。

そのためにはロットをまとめる、品質保持技術を活用する、国内では安いのが海外で高く売れる規格を選ぶ、到着後のロスをなくすためエンドユーザーに保存方法を伝授するなど、知恵を絞らなければならない。さらに、県同士の競争ではなく、オールジャパンで取り組むことも輸出に近づく道だと考えているため、愛媛FAZでは県外の農水産物も取り扱う。

奈緒子さんは野菜の生産、加工、販売を手掛ける有限会社トリプルウィン（松山市）の水菜をシンガポールに輸出している。同社専務の松田信也さん（四四歳）に「取引に限らず、農産物に関する知識を教えていただく良き相談相手」と信頼を寄せる。奈緒子さんの奮闘ぶりをよく知る松田さんは「輸出というのは硬い壁に針で穴を開けていくほど根気のいる作業。開いたと思ってもすぐ埋まることもある。でも、奈緒子さんの頑張りで穴が徐々に大きくなれば、農家にとってもうれしい」と期待する。「輸出は簡単じゃない」と部外者ほど言いがちだが、小さい糸口をたどって道を切り開いていく人たちの地道な努力が日本農業の未来に光を照らししてくれる。奈緒子さんは間違いなくその一人だ。

（青山浩子／文 河野千年／撮影）

※FAZ法とは「輸入の促進及び対内投資事業の円滑化に関する臨時措置法」二〇〇六年の法期限をもって廃止された。

「トウモロコシって生で食べてもこんなに甘いのに!」

「弾けんばかりのトマト! 甘酸っぱさが絶妙!!」

「収穫したばかりのナスがみずみずしい!」

出演している菜園番組で初めて体験した、採れたて野菜を食べたときの感動が忘れられず、去年から自宅でも野菜を育て始めました。トマト、ピーマン、カブ、パセリ、パクチー……全部で一〇種類を超える野菜の数々。ベランダに所狭しと並んだプランターを眺めることから、毎朝が始まります。芽が出てきた、本葉が出た、花が咲いた、小さな実がなった、実が色付いてきた、そんな些細な成長がとても嬉しく、なんだか心が穏やかになる。野菜たちとの対話の時間は私にとって癒やしです。

ただ、家庭菜園はもちろん楽しさだけではありません。虫が大嫌いな私は、悲鳴を上げながら増殖していくアブラムシと必死に格闘したり、植え付けたばかりの弱い苗が強風で根元からポキッと折れてしまった……大変なことや悩むこともたくさんあります。でも、やっぱり手のかかる子ほどかわいいんですね。

そんな親ばかとも言える愛着を持って育てた野菜が、おいしくないはずがありません。収穫できたトマトは少し酸っぱかったし、ピーマンは普通のものより小ぶりだったり、カブはいびつな形だったりしたけれど、それでも格別なおいしさでした。

家庭でのプランター栽培を通して野菜の魅力だけでなく大変さも経験した分、普段いただく野菜に対しても考え方が変わったように思います。

実は、野菜よりもお肉やお魚が好きだった私。けれど、野菜の素晴らしさ、奥深さを知った今は、野菜を積極的に取るようになり、料理には野菜が欠かせないものになっています。

野菜と果物をミキサーにかけて作るスムージーは大好きで、毎朝欠かさず飲んでいるし、旬の野菜を使った創作料理を考えるのも楽しい。それに、野菜をたくさん食べるようになってから体調も良くなった気がします。

これからもたくさんさんの野菜を栽培しながら、野菜いっぱい生活を楽しんでいこうと思います。



フリーアナウンサー
酒井 千佳

さかい ちか
京都大学工学部建築学科卒業。北陸放送、テレビ大阪を経て現在フリーアナウンサー。NHK Eテレ「趣味の園芸 やさいの時間」(司会)に出演中。

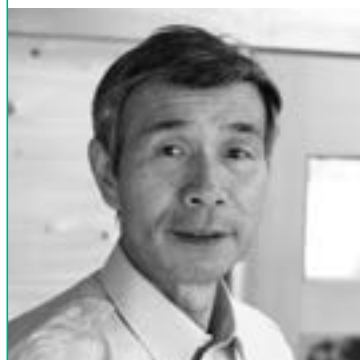
野菜いっぱい生活

NPO法人

ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会

武藤 一夫

(六三歳)



●むとう いちお●

一九五二年福島県生まれ。県立安達高等学校卒業。二本松市農業委員。二〇一四年六月にNPO法人ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会の理事長に就任。ナメコを栽培し、レストランと民宿の運営も手掛ける。

か

つて日本屈指の養蚕地帯であった福島県二本松市東和地域(旧東和町)は、日本の原風景が感じられる自然豊かな里山です。

近年、安い輸入品に押されて養蚕が衰退し、後継者不足と高齢化によって桑畑の荒廃も進んでいます。この典型的な過疎地を何とかしなければいけない、という危機感から、地域でバラバラに活動していた団体が集まり、二〇〇五年にNPO法人ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会を立ち上げました。

市から指定管理を受けた「道の駅ふくしま東和」を活動の拠点として、安全・安心な農産物の生産、加工、販売をはじめ、特産品の開発や都市との交流などを通して、持続可能な地域経済を念頭に地域を活性化させるプロジェクトを展開しています。

私たちは、まず放棄された桑畑の再生に取り組みました。桑はDNJ(デオキシノジリマイシン)、カルシウム、鉄分、ミネラルが多く含まれており、糖尿病や高血圧の予防に効果があると言われます。その効

果に着目し、桑の葉をパウダー化したお茶や桑の実ジャムなどを開発しました。桑の葉や実を使ったこれらの商品は、地域の特産品となっています。

また、安全・安心な農産物を提供するため、地元の堆肥を使って土作りをし、そこで栽培された有機農産物は、独自ブランド「東和げんき野菜」として道の駅などで販売しています。これは非常に好評で、道の駅だけでも一億円の売り上げになりました。

さらに取り組みの一つとして、積極的に移住者を受け入れています。就農希望者には一年程度、農家に住み込みで研修を受けさせながら、地域を見極めてもらいます。正式に定住を決意した人に農地や住む家を紹介し、これまで二〇人余りが新規就農者として定住しました。彼らは消防団やNPOの活動などに参加することで、地域への帰属意識を高めています。

活動の成果が徐々に表れ始めたころ、東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所事故が起き

ました。安全・安心な農産物を提供する活動を根幹から揺るがしかねない、まさに天変地異が起きたのです。避難指示はなかったものの、私たちはここに住み続けられるのか、作った野菜やお米を子や孫に食べさせられるのか、疑心暗鬼に陥りました。

以 前から取り組んできた循環型農業により施された有機物の働きで、放射能汚染が抑制されていることを日本有機農業学会の先生方が証明してくれました。

これによって私たちは自信を取り戻し、土壌診断や放射能の測定を自分たちで行って、独自の基準で安全であることを示しています。これらが迅速にできたのは、NPO設立時に地域を守るため「各人がやれることをやる」と徹底的に議論したことが大きいのです。

風評被害によって、道の駅の売り上げは、当初の三〜四割も落ちましたが、仲間には「作り続け、売り続けよう」と訴えました。地域の農家の八割を占める高齢の農家が一年間、生産を控えれば、翌年も断念してしまう恐れがあり、地域を守るために休むわけにはいきませんでした。

震災後、人口減少は加速しました。しかし、「災害がなくても、過疎化はやがては来る現実」と受け入れ、地域づくりの姿勢は変えませんでした。

地域の農家が結集し、耕作放棄地を開墾してブドウを植え、かつての養蚕施設をワイナリーにし、今年、そのワインを発売しました。また、就農した元官僚の青年は、自らの夢であった地ビール作りに挑戦し、ブルワリーを開設しました。

さらに、農家民宿では、大人をターゲットにしたお酒を飲みながら交流を深める「アルコールツーリズム」や福島県の災害現状を伝える研修を目的とした人々が、年平均一〇〇〇人余り訪れています。これらの取り組みを一過性に終わらせず、よりいっそう魅力を高める努力が必要です。

震災の記憶は年数が経過すれば風化し、経済的な保障も減少するので、将来について心配は尽きません。しかし、私たちは「君の自立、ぼくの自立がふるさとの自立」を掲げ、これからも「里山の自然と人の輝くふるさとづくり」を目指します。私たちの活動が、同じように過疎化と災害に悩む中山間地の方々の参考になればと思います。

F

「君の自立、ぼくの自立がふるさとの自立」 里山の自然と人の輝くふるさとづくりを

刃物を使わず皮むきをする加工法

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構

本部 連携普及部 連携広報センター 主任研究員

野口 真己

果

実の皮むきは、刃物を使うナイフ剥皮が一般的です。それでは、ミカンやモモの糖液漬けの缶詰を加工する際に、どのように皮むきをしているかご存じでしょうか。

缶詰の工業的な大量加工で最も普及しているのが薬剤剥皮です。酸やアルカリの水溶液中で果実を加熱や加温しながら、化学的に果皮を溶かす方法です。この利点の一つとして、液体に果実を漬け込む処理なので、果実の形状に影響されにくいことが挙げられます。

刃物を使わず、液体での処理で皮むきをする加工法として、薬剤剥皮の後に開発されたのが酵素剥皮です。果皮の主成分の一つであるペクチンを分解する酵素の水溶液を果皮組織に染み込ませ、果皮を軟化、崩壊、溶解のいずれかの状態にして、分離除去する方法です。

酵

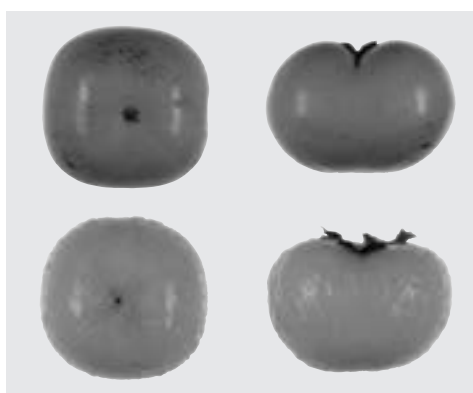
素剥皮が初めて可能になった果実は、かんきつ類です。かんきつ類に続いて、干し柿加工での皮むきを省力化するため、カキを対象とした新しい酵素剥皮工程が開発されました。酵素剥皮の成否は、果皮組織にいかにして酵素液を染み込ませられるかに大きく影響されます。

カキの場合、酵素処理の前に果実全体を短時間沸騰水で加熱する物理的処理を加えること

で、酵素液が果皮によく染み込み、その後の酵素処理が進行しやすくなりました。

果実類以外で加工時に皮むきが必要な作物であるイモ類と根菜類でも、酵素剥皮ができないかとの要望が一部であります。

例えば、根菜類のショウガは形状が歪なため、ナイフによる手作業での皮むきは煩雑で、また装置の開発も難しそうです。里芋では作業者の手のかゆみの負担軽減が求められています。



酵素剥皮したカキ「太秋」果実（上：剥皮前、下：剥皮後）

られます。

酵素剥皮が可能な作物は、現状では地上の空気中の作物である果実類に限定されていますが、カキで酵素剥皮が可能になったように、酵素処理だけでなく、これに他の化学的処理や物理的処理を組み合わせることで、刃物を使わない新しい皮むき加工法を開発できるかもしれません。将来、土壌中の作物であるイモ類や根菜類にも拡大されることが期待されます。

F



Profile

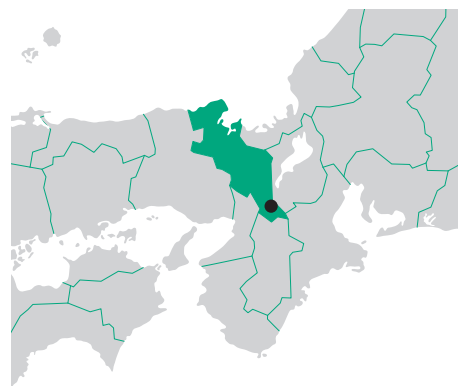
のぐち まさき
1978年神奈川県生まれ。東京大学農学部卒業後、農研機構果樹研究所入所。果実加工の分野を担当し、果実の酵素剥皮技術の普及に携わる。2015年より現職。



農山村の復権を目指して 茶源郷は生業景観のまちづくり

京都府相楽郡和束町 町長

堀 忠雄



「茶源郷」を目指して

和束町は京都府の最南端、相楽郡の東部に位置し、人口はわずかに四三〇〇人余りの小さな農山村ですが、古くから宇治茶の産地であり「お茶のまち」として発展してきました。

お茶の栽培は鎌倉時代に始まり、気候や土壌、地形が栽培に適していることから、現在では宇治茶の主産地として京都府の茶の栽培面積の約半分を占めております。和束町で作られた茶葉は、品質においても全国有数の高級品だと自負しています。町全域に広がる茶畑は、山なりに開墾され機械化も進まず、今日まで家族農業に支えられ守られてきました。その生業の茶畑の景観は、二〇〇八年一月、生業景観として京都府景観資産第一号に登録、同年三月には京都府文化的景観に選定されました。

しかし最近では、若齢層を中心に都市部への流出・少子高齢化による人口減少など急激な過疎化

を招いており、その影響は大きく、深刻なものになっていきます。茶業の後継者がいなくなり、茶畑を一年間放置しただけで風景そのものが消えてしまいかねません。

そうした状況下において、町としては住民の皆さんとも協働して、自然に対し謙虚で、かつ自然とのコミュニケーションがあるまち、緑豊かな自然に恵まれた農村空間を生かした、魅力と生きがいを感じるまち「茶源郷 和束」の実現を目指し、積極的な取り組みを進めています。和束町では農山村の復権を目指しており、ここにまちづくりの原点があります。

まず、「茶源郷 和束」の実現のためには茶農家が元気になる必要があります。そこで、茶農家がもうかって経営が安定する仕組みを整えることが大切だと考えました。前述のとおり、和束町は茶産地として非常に歴史があり、これまで各農家が個人工場でお茶を製造していましたがそれでは利益が少ない。そこで、製造コストを抑える

ことなどを目的に茶工場の共同化、また、委託加工を目的として工場の建設を促しました。工場は、廃校となった小学校跡地を町が提供し、JAが製茶工場を作りました。これにより茶農家の労力軽減、品質の標準化、製造のコストダウンができ収益が上がるようになりました。

都市農村交流にも積極的に取り組んでいます。二〇〇〇年頃から緑茶ブームでお茶に対する興味が世の中に高まり、また農作物産地表示の義務付けなども追い風となって「産地でほんま物を！」と思われた人々が農作業体験などを目的に来てくださることが徐々に増え出したのです。このことから和束町では、「茶産地からの情報」の発信を強化し、関西・東海経済圏主要都市までほぼ一〇〇キロメートル圏内という立地を活かした都市農村交流を活性化させようという取り組みを始めました。この世の万物は、全て両極を有しており両極が交流してこそ新しいものが生まれます。都市は都市、農村は農村では新しいものは生

profile

堀 忠雄 ほりただお

1945年和束町生まれ。68年立命館大学法学部卒業後、2年間の民間企業を経て和束町役場に就職。2001年4月町職員を中途退職し和束町長選で初当選。現在4期目を務めている。美しい「自然環境」や「生業の景観」を維持・保全し、和束町のブランド力を高める「茶源郷 和束」の実現を目指し町民とともに取り組んでいる。

和束町の取り組み概要

「自然環境」や「生業の景観」を維持・保全するために、先人達が守り継いできた歴史・文化を基本に、農村空間や農山村の多面的機能を生かした取り組みを町民と協働して取り組む。さらに、和束町のブランド力を高めるなど「ずっと暮らしたい活力と交流の茶源郷 和束」の建設に邁進している。

民間の取り組みを積極支援

まれません。都市と農村が交流してこそ真の人間社会が実現するのではないのでしょうか。町の活性化、担い手の確保など、都市交流による担い手の確保、町の活性化ができると考えたのです。

町は、都市住民と農家とのマッチングに係る民間の取り組みを、新たな経営戦略として支援しています。例えば、一九九五年から農家さんが中心となって活動し、ハローワーク、学生生協による労働者やボランティアの受け入れを行う「援農プロジェクト」がありました。これが、二〇一四年に「ワヅカナジカンプロジェクト援農隊」の結成へと発展していききました。これは、農繁期の三カ月間、茶農家の作業をアルバイトで手伝い、一つ屋根の下、

共に暮らし、働き、和束町を満喫してもらうというものです。一四年は総勢一四人の方が参加してくださいました。農作業の休憩時間などに、農作業をしているその茶畑から収穫された茶葉だけで作られた茶をいれて、参加者に飲んでもらっています。が、このある甘い味に改めてお茶の魅力に気が付いたと言ってくれた方もいました。ワヅカナジカンプロジェクトでは町は廃校となった高校の校舎を宿泊施設として提供しています。

このような積極的な交流事業から、和束町が気に入られ、移住した方も出てきたのです。茶農家のお手伝いを通じてお茶や農業の魅力に気づき、新規就農者も生まれています。さらに結婚するケースも出てきました。積極的な取り組みが、課題解決の糸口をつかむ結果につながっています。



上：町を囲む山の斜面には茶畑の畝がずらりと並ぶ

下：「国際ワークキャンプ」で和束町に来て茶葉の刈り取りに挑戦する外国人

和束町には海外からも多くの方が来てくれるようになりました。○一年から始まったNPO法人日本国際ワークキャンプセンターNICEとNPO法人わづか有機栽培茶葉研究会の共催による「国際ワークキャンプ」をご紹介します。これは外国人が和束町に約二週間滞在し、有機栽培茶園での作業、公共施設の草刈り、茶の挿し木、ホームステイ、茶歌舞伎など、地元の人々と共に多くの時間を共有するものです。言葉も文化も違う外国人との交流は、住民に新しい風を運んでくれているようです。

これらの都市農村交流によるリピーター率は高く、日本人は約七〇％、外国人も複数回来てくださっています。

さらに二一年には、和束町内で活動する各種団

体、機関、法人などにより「地域力推進協議会」を組織し、地域に潜在する資源を活かしたまちづくりを進めています。

和束町を含む山城地域の八市町村は、今年四月、文化庁において、「日本茶八〇〇年の歴史散歩」として「日本遺産」に登録されました。

これにより和束町の山なりに続く茶畑の景観が広く知られることとなりました。今後は、国内はもちろん、外国からも観光に訪れる方がさらに増加することが期待できます。また、京都府と共に目指している「世界文化遺産」の登録に向けても大きな弾みになっています。

これら景観の認知度を町内外に広く高めるためには、「美しい」「きれい」だけでなく付加価値を付ける戦略が必要です。そこで、「健康」「癒やし」効果に着目し、町内の景観巡りができるウォーキングコースを「和束緑泉コース」と名付け、整備しました。温泉は肌から鋭気を増幅すると例えるなら、「緑泉」は視線から癒やされるということです。

約三キロメートルのコースですが、茶畑を始め、緑豊かな自然に恵まれた水と空気のおいしい農村空間、弥生時代から形成され歴史と文化が豊富な集落景観、町の防災機能でもある自然のため池など、和束町の魅力を歩きながら目で感じていただけたと思います。歩かれた方からも「絶景だった」「癒やされた」という感想をいただいています。

今後、茶畑など、和束町の景観は大きな地域観光資源になると私たちは考えています。

山城地域には、西部に関西文化学術研究都市（学研都市）があります。西部地域の学研都市は、

全国でも一、二位の人口増加をしている市町です。一方、東部地域にある、和束町、笠置町、南山城村の三町村は日本創成会議の公表資料（二〇一四）で見ると消滅の可能性が高いとされています。

目指すは「学術研究農村」

しかし東部農村部は、この地域を支える源でなければならぬと考えています。両地域が連携して一つの学研地域として未来を見つめた地域づくりを実現することで、人や自然に優しい新しい未来の都市が生まれ、近畿の核としての拠点づくりも期待されることです。地域連携については、京都府においても推奨されています。そこで〇八年より三町村で「相楽東部広域連合」を設立しました。西部の学研都市に対して自然の「理」を生かす「学術研究農村」を掲げています。

私たちは学研都市に対抗しているわけではありません。むしろ学術研究農村は、学研都市にも劣らない多くの可能性を秘めていると思っています。和束町では、その可能性を少しでも見つけ出し、それを活かしたまちづくりを積極的に進めています。

一例を挙げましょう。京都府道路事業で歩道工事の施工に当たり、学研都市と同様に明るい街灯の設置をお願いしたところ、農家から稲が実らないという意見が寄せられました。調べてみると稲穂は暗い夜に実り、稲作には夜には夜の、そして昼には昼の働きがあることが分かりました。稲の生育にとっては、明暗どちらも大切な役割があるということです。

このことは植物、動物問わず、生きているもの

全てに言えることで、人間もまた、細胞は昼間に壊れ、夜睡眠時に再生されているとのことです。

早速、街灯を蛍の光程度に抑え、足りないところは足元を照らす仕様に、変更をお願いしました。ちなみにこの設計は、自然にも人にも優しい設計ということで、「茶源郷仕様」と名付けました。

このように私たち人間も自然の営みの中で生かされていることを改めて認識させられることになりました。

現在の社会に目を向けますと自然との疎遠の傾向が強く感じられ、自然を敬うことよりも人間本位の知識に頼り過ぎた、利便性や合理的、計算的などあまりにも自己中心的な考えが優先されていないでしょうか。私は、今こそ今日の社会のありさまについても教育の段階から検討する必要があると考えています。このことはまた、将来に持続し得る農山村のまちづくりにとっても不可欠であり、同時に瑞穂の国として国の将来に係る重要な問題でもあります。

私たちは今一度自然の恵みを大切にした生活を取り戻し、いつも元気で生きがいを感じながら人生を送りたいものです。和束町の生業景観もそのことによって守られることは言うまでもありません。

「茶源郷 和束」の実現を目指した取り組みは他にもたくさんあり、全てを記載することは残念ながらできません。しかし、農山村の復権を目指して活動する和束町の方向性を感じていただけたのではないかと思います。これからも「茶源郷 和束」を目指し取り組んでまいります。ぜひ、応援してください。

『食卓からアサリが消える日』

三輪節生 著



(海鳥社・1,700円 税抜)

食材ではなく生きものだという視点を

宇根豊

(百姓)

私も二年前からウナギを食べないようにしているが、ウナギに限らず事態がここまで深刻だとは、^{あぜん}啞然とした。三〇年前の漁獲(収穫)量と比べて、近年はどれほど減っているかをおおまかに本書から拾い出してみよう。アサリ二〇%、シジミ二一%、ハマグリ〇%、タイラギ(有明海)一%、シラスウナギ一五%、アユ一七%、コイ四%、フナ八%、ドジョウ二四%、シイタケ三一%などなど。和食がユネスコの世界無形文化遺産に登録され、和食ブームだと浮かれている場合ではない。和食の食材の危機はこの一〇年余りで急激に進んでいる。原因は乱獲か、自然環境の破壊である。元新聞記者の著者は、原因を丹念に取材して突き止めようとする。しかし、因果関係は簡単に突き止められない。だからこそ生産現場の対応もあまりに遅れている。

さらに食材の漁獲(収穫)の影響は、食事だけでなく、人間の仕事にも及ぶ。例えば、かつお節はカツオを椎^{しい}や^{かし}などの広葉樹で二〇日ほど燻煙して作るのだが、かつお節一本にその二倍の重さの薪を使う。広葉樹は二〇年周期で伐採するから、萌芽再生で若返る。伐採されないと、山は荒れていく。かつお節の出汁に舌鼓を打つことは、照葉樹林を保護していることにもなるわけである。シイタケは言うまでもない。

さて、和食を守るためにはどうしたらいいのだろうか。著者の提案はまず生産者に「資源保護」の自覚と責任を求めている。かなりの産地で漁獲の「自主規制」が行われ始めているが、十分ではない。まして自然環境の保全まで責任を負うことは、農業に限らず、漁業においてはさらに難しい。

そこで消費者の責任・役割が重要になってくる。自然環境を保全しようとしている産地を応援するためには、産地の取り組みを知らなければならぬ。価格や品質や安全性よりも、もっと大切なものに気付くための情報を産地は発信すべきだ。それは新しい価値観の発信でもある。そして消費者は「選択する」のである。自然の恵みをいただくだけでなく、恩返しをする消費こそが、和食の真髄であった。

つい私も「食材」と書いてしまったことを恥じたのは、著者の「生きものとともに生きる覚悟」という記述に出会ったからだ。全て人間と同じ「生きもの」であった。

F

読まれています 三省堂書店農林水産省売店 (2015年6月1日~6月30日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 食品を科学する 意外と知らない食品の安全	食品の安全を守る賢人会議/編著	大成出版社	1,500円
2 農林水産物・飲食品の地理的表示 地域の産物の価値を高める制度利用の手引	高橋 梯二/著	農山漁村文化協会	1,800円
3 農山村は消滅しない	小田切 徳美/著	岩波書店	780円
4 農業維新	嶋崎 秀樹/著	竹書房	850円
5 田園回帰1%戦略 地元にと仕事を取り戻す	藤山 浩/著	農山漁村文化協会	2,200円
6 暮らしのなかの食と農 官邸農政の矛盾 TPP・農協・基本計画	田代 洋一/著	筑波書房	750円
7 食料・農業・農村白書 平成27年版	農林水産省/編	農林統計協会	2,600円
8 森林・林業白書 平成27年版	林野庁/編	全国林業改良普及協会	2,200円
9 日本農業は世界に勝てる	山下 一仁/著	日本経済新聞出版社	2,000円
10 コメをやめる勇気	吉田 忠則/著	日本経済新聞出版社	1,800円

戦略的経営で稼げる農業へ 農業法人向けセミナー開催

四月一七日、熊本市内にて熊本県農業法人協会、農林中央金庫などと「農業法人等担い手推進セミナー」を共催し、一四五人にご参加いただきました。

宮城大学名誉教授の大泉一貫氏をお招きし、「成長産業と農業法人」「熊本農業を日本一稼げる産業へ発展させるために」と題して、ご講演いただきました。

県内農業の多様性や欧州の先進国型農業の特徴を基に、今後の農業経営の在り方をご紹介いただき、参加者からは「戦略的な経営で稼げる農業にしたい」との声が多く寄せられました。（熊本支店）



講演に熱心に耳を傾ける参加者

農業者と金融機関との関係発展 を目指した研究会を開催

六月一九日、かごしま農業経営研究会との共催で「第七回かごしま農業経営研究会」を開催し、一二二人にご参加いただきました。

会議では、鹿児島県農業法人協会会長の古川弘氏より、「金融機関等に求めること」と題してご講演いただき、マッチングなどコンサルティング機能の強化やエリアにとられない全国的な事例紹介などの情報提供、アドバイスの重要性についてお話しいただきました。

参加者からは「金融面などのサポートの必要性を再認識できました」などの感想が寄せられ、充実した講演会となりました。（鹿児島支店）



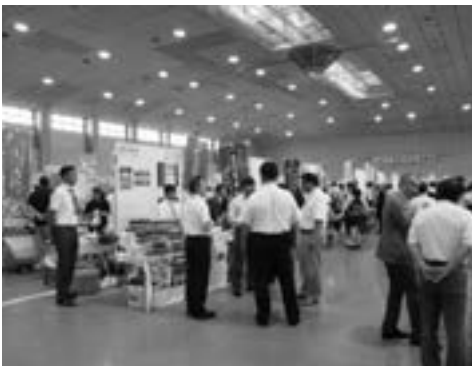
金融機関のサポート強化について語る古川氏（中央）

北海道新幹線開業を見据えた 商談会を開催

六月二五日、青森市内において、青森県や日本公庫青森支店などで行く実行委員会主催による「青森の正直」と銘打った商談会を開催しました。商談会には一〇七社の企業が出展し、大手百貨店など県内外の食品関係バイヤー三五〇人に対して、県産の農林水産物や加工商品などを積極的にPRしました。

「じょっぱり黒にんにく」を出品した有限会社ケイエス青果取締役の三上真寿実氏からは「販路拡大を図れて有意義でした」との感想が寄せられ、バイヤーからも好評価を得られた商談会となりました。

（青森支店）



バイヤーに商品の説明を行う出展者

農産物のブランド構築に 公的支援制度活用講演

七月二日、日本農業法人協会山梨県支部との共催で、研修会および懇親会を開催し、日本公庫のお客さまや関係機関など二四人にご参加いただきました。

公益財団法人やまなし産業支援機構プロジェクトマネージャーの鷹野啓司氏と、山梨県よろず支援拠点コーディネーターの中嶋豪氏をお招きして「公的支援制度活用による農産物のブランド構築」をテーマにご講演いただき、参加者からは「経営に役立つ情報が得られました」などの感想が寄せられました。今後もお客さまの経営発展に取り組んでまいります。（甲府支店）



参加者は興味深い講演に聞き入りました

新規就農を希望される方へ

幅広く利用できる無利子の 青年等就農資金をご案内いたします

新たに農業経営を開始される方を支援するための資金です。
市町村から青年等就農計画の認定を受けた「認定新規就農者」による農業生産のための施設・機械の取得のほか、家畜の購入費・育成費、借地料の一括前払いなどを対象としており、幅広い事業にご利用いただけます。

■ 青年等就農資金の概要

ご 利 用 いただける方	認定新規就農者 ※市町村から青年等就農計画の認定を受けた個人・法人	
	青年等就農計画の達成に必要な次の資金 ただし、経営改善資金計画を作成し、市町村を事務局とする特別融資制度推進会議の認定を受けた事業に限ります。	
資 金 の 使 い み ち	施設・機械	農業生産用の施設・機械のほか、農産物の処理加工施設や、販売施設も対象となります。
	果樹・家畜等	家畜の購入費、果樹や茶などの新植・改植費のほか、それぞれの育成費も対象となります。
	借地料などの一括支払い	農地の借地料や施設・機械のリース料などの一括前払いなどが対象となります。 ※農地の取得費用は対象となりません。
	その他の経営費	経営開始に伴って必要となる資材費などが対象となります。
融 資 条 件	返済期間	12年以内（うち据置期間5年以内）
	融資限度額	3,700万円
	利率（年）	無利子（お借入の全期間にわたり無利子です）
	担保・保証人	実質的な無担保・無保証人制度 担保：原則として、融資対象物件のみ 保証人：原則として個人の場合は不要、法人の場合で必要な場合は代表者のみ
ご 留 意 いただきたい 事 項	1 国の補助金を財源に含む補助事業（事業負担金を含む）は、本資金の対象となりません。ただし、地方公共団体の単独補助事業や融資残補助事業（経営体育成支援事業）は対象となります。 2 審査の結果により、ご希望に添えない場合がございます。 3 上記以外にも資金をご利用いただくための要件等がございます。 詳しくは、事業資金相談ダイヤル（0120-154-505）または最寄りの日本政策金融公庫支店（農林水産事業）までお問合せください。	

みんなの広場

◆増田寛也氏の特集を読み、地域の魅力とは何かを考えさせられました。私の地元は「消滅可能性都市」ですが、たくさん魅力があります。しかし、その魅力は地元の人たちには身近にありすぎて、気付きにくいものです。農業・農村の活性化にも、外からの力が必要になってくると思います。

（北見支店 藤井隆太）

◆「農く食の邂逅」を読んで。私もお米が大好きで、毎食一〜二合、満腹になるまで食べています。公庫職員としてはもちろん、一お米ファンとしても、稲作農家の皆さんを支えたいと思います。ぜひとも白川さんのおいしいお米を食べてみたいと思いました。（福島支店 犬飼舜）

◆集落に学生が赴き、農業を手伝ったり、農村の生活を体験する話はよく耳にしますが、なかなか地域活性化につながる事例は少ないと思います。「まちづくりむらづくり」で紹介されていたような、学生の力で地域が活性化する取り組みが、ぜひ他の地域にも広がってほしいと感じました。（富山支店 川副温子）

◆「観天望気」を読んで、私は就職活動中の自分を思い返していました。私の「くいちから」の原点である自分が育った鹿児島島の農と食に恩返し

しがしたい。この想いを再認識し気合を入れなおして、初心を忘れずに業務にまい進していきたいと思います。（鹿児島支店 古市 奈津美）

前号に続き、本年度新入職員による本誌六月号への感想を掲載させていただきます。

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上編集させていただきます。

「郵送およびFAX先」

〒100-0004
東京都千代田区大手町一―九―四
大手町フィナンシャルシティノースタワー
日本政策金融公庫
農林水産事業本部
AFCフォーラム編集部
FAX 〇三―三七〇一―三五〇

メール配信サービスのご案内

日本公庫農林水産事業では、メール配信による農業・食品産業に関する情報の提供をしています。メール配信を希望される方は、日本公庫のホームページ(http://www.jfc.go.jp/n/service/mail_nourin.html)にアクセスしてご登録ください。（情報企画部）

編集後記

④山形新幹線のカリスマ販売員、茂木久美子さんは山形弁による接客で有名です。お客さまは方言による商品案内や地元の情報にとっても癒やされ買いたい気持ちが増すのでしょう。全国から人が集まる「アグリフードEXPO」でも方言が飛び交います。方言だからこそ伝わる商品のストーリーがあります。その出会いが楽しみです。（嶋貫）

④「農く食の邂逅」で紹介した、はじける笑顔の玉井さん。でも、心の中は厚い壁に穴を開けるほど強い意志を持った方なんです。その情熱は彼女に任せたら大丈夫と、農業者から絶大な信頼を得ています。玉井さんも、ご興味のある方も、次頁掲載の「アグリフードEXPO東京」にぜひ足を運んでください。お待ちしております。（小形）

④農業や農村におけるリーダーの資質とは何かを探った今号。小野さんが指摘されているように農業を取り巻く環境が大きく変わろうとしている現在では、強いリーダーシップを発揮する者が不可欠です。吉弘さん、境野さんに続く未来を明るく照らすリーダーが多く輩出され農業や農村が活性化すること期待が膨らみます。（城間）

④ウナギだけでなく、他の生き物にも、絶滅の危機が迫っています。今すぐに絶滅するということではないため、あまり意識しないかもしれませんが、消費者の意識を変えることで救えるなら『食卓からアサリが消える日』の書評で宇根さんがおっしゃるように「恩返しをする消費」が広まってほしいと思います。（林田）

AFCフォーラム Forum

編集

大本 浩一郎 嶋貫 伸二 藤澤 典子
清村 真仁 飯田 晋平 小形 正枝
城間 綾子 林田 せりか

編集協力

青木 宏高 牧野 義司

発行

（株）日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ <http://www.jfc.go.jp/>

印刷 凸版印刷株式会社

販売

（一財）農林統計協会
〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-9-13
目黒・炭やビル
Tel. 03(3492)2987
Fax. 03(3492)2942
E-mail publish@aafs.or.jp
ホームページ <http://www.aafs.or.jp/>

定価 514円（税込）

④ご意見、ご提案をお待ちしております。

④巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとと田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

第10回記念 6次化の先駆者—EXPO仲間大集結



アグリフード EXPO 東京 2015

プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

日時 8月18^火日/19^水日
10:00~17:00 10:00~16:00

主催 JFC 日本政策金融公庫

会場 東京ビッグサイト 西1・2ホール



「農」のリーダー像に迫る



『雨がふったささらおどり』三上 蘭 長野県上田市立塩田西小学校

■AFCフォーラム 平成27年8月1日発行(毎月1回1日発行)第63巻5号(780号)
 ■発行/(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
 ■販売/一般財団法人 農林統計協会 〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-9-13 Tel.03(3492)2987 ■定価514円 本体面格476円



日本政策金融公庫 農林水産事業本部

<http://www.jfc.go.jp/>

AFCフォーラム(2015年8月号) 読者アンケート

「AFCフォーラム」をご愛読いただきまして、ありがとうございます。本誌をより充実させるために、アンケートにご協力をお願いいたします。このままFAXか郵送でお送りください。

お名前 (フリガナ)	性 別	年 齢	職 業
	男性 女性	歳	
ご住所	〒 ー ー		
	tel. ー ー		

1 掲載記事について、内容はいかがでしたでしょうか？（○をご記入ください）

記事区分		良かった	どちらとも いえない	良くなかった	記事区分		良かった	どちらとも いえない	良くなかった
1	観天望気				8	経営紹介			
2	特集	いま農業現場に求めるリーダーシップ			9	主張・多論百出			
3		集落営農組織の法人化が地域を変えた			10	変革は人にあり			
4		自由化時代を読み成長を続ける経営手腕			11	耳よりな話			
5	情報戦略レポート				12	まちづくりむらづくり			
6	農と食の邂逅				13	書 評			
7	フォーラムエッセイ				14	みんなの広場			

2 AFCフォーラムで取り上げてほしい特集テーマがありましたら、ご記入ください。

3 本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを200字程度でお寄せください。本誌「みんなの広場」に掲載します。
(紙面の都合上、編集させていただく場合がありますので、あらかじめご了承ください)
掲載の場合には薄謝進呈いたします。(匿名での投稿はご遠慮ください)

ご協力ありがとうございました。